

“ヘタクソのある彼らが地域を救う”

～未来への下ごしらえ～

野々村 光子さん（東近江圏域 働き・暮らし応援センター “Tekito-”）

「あの～・・・これで、うちの息子を働かせてもらえんやろか？」

70歳を超えたと見える女性。土の付いた大根が三本入ったナイロン袋を差し出しながらうちのセンターのドアを開けた。息子は大学卒業後、大手の電機メーカーへ就職したが3か月で辞め、2年間は職を転々としたがその後、自宅の自室のみで生きる暮らしを送ってきたとの事。現在45歳。

滋賀県の琵琶湖と山の間に位置する、田舎な地域ではこんな「働かせたい」と「働きたい」と「働きたくない」声が毎日聞こえる。そんな小さな声を、地域の当たり前に、そしてそんな彼らの人生のものがたりが地域の未来を創る仕組みを田舎なこの町に仕掛ける。

“働くということ”

私たちは毎日たくさん

「働きた」と出会う。

その「働きた」と思いには

色んな意味がざしり。

家族の愛や自分へタクソや

我慢したい気持ち。

稼いだお金で居酒屋：：

彼らの「働きた」と出会う度

「働くことが持力

大きさに驚き、学ぶ。

また働くことは

単なる作業ではなく、

生きる力を育むステージ：

そんなステージに五 姿は

誰もが真剣 誰もがカッコイイ、

誰もがほんまもん。

輝く場所がここにある。

Tekito-

「なんで面接落ちるんやろう・・・」

「働くことが分からん・・・」

「働きたくないねん・・・」

「もっと、気張りたいねん・・・」



『 Tekito- 』

生活、就労・・・全てその人の24時間の中に存在するもの。

だからライフスタイルはその人のもの。

だったら、そのスタイルがその方にとってちょうど適当である方が良い。

そして、そんな24時間の積み重ねの毎日に地域の風が通り過ぎ、

その風を感じられるゆとりが持てるテキトーさが存在するならもっと良い・・・

と思います。

【広辞苑 応援センター】

凸凹が集まるセンター。

へなちょこ男子、企業の社長、民生委員さん、学校の先生・・・色んな人が地域の小さな声とコトを持ち込む事務所。

ちょっと心が疲れて仕事を休んでいた42歳の男性が教えてくれた事。

働き続ける事は、自分に適している仕事（適当）を自宅に帰って缶ビール1本飲めるゆとり（テキトーさ）が大事。けど難しいなあ・・・

大事で難しい事。それが、うちのセンターの名前です。



**人生は太っちょがええ。
カッコつけて生きて行こう。**

就労支援を看板に掲げながら、就労を目標にしない。生き方を大事にする。

制度で決められるコト、求められるコト。けど、働けるラインは現場にはない・・・

母ちゃんが亡くなって独り暮らしになって、もう24年になる男子。

片づけが苦手な、大事なもんを無くす事に不安が強い男子の家は物で溢れている。

「働きたいねん」ゴミの中で彼はつぶやく。

働くことより大事な、かっこええ大人になる為に大事なもんだだけを残す為に、応援団と一緒に自宅を触る。

「働きたい」から始まる暮らしの応援。この地域で生き続ける応援。

働くことを切り取らない応援が、その人にとってちょうどいい暮らし方・働き方に繋がる。

『社長、企業にしか出来ん応援してんか。』

『社長、遠慮はいらん。配慮をちょうだい。』

『社長、どんな時代が来ても会社も地域も潰さん約束しよう。』

野々村より。

企業の価値。

「社長、見学させて・・・」企業のドアを叩くとき、必ず言う言葉。

働いた経験が乏しい働きたい人にとって、会社を見る、働く人を見ることは大きな財産になる。企業にしか出来ない応援。

人口減少の中で、『人材』ではなく、『人材』が絶えない地域をどう実現するか。

この地域に自分の会社がある事の意味を解く。いつも上から目線。

人と企業の繋がりとは、雇用というカタチだけではない。

もっと広く深いものであることを共有する。独り勝ちせず、ぼちぼちの地域の創造・・・

『TEAM 困救』

時代の流れと共に

地域の「困りごと」は見えづらく、そしていつの間にか

それは「諦めごと」になり始めている。

私たち「働きもん」は、そんな地域の困りごとを救うチームである。

誰が困っても解決できる地域へ・・・

そんな事を目指す我らは・・・Team 困救



働くことに憧れる時間。

30年前に造られた緑豊かな地元図書館。丁寧な葉刈りをしてくれる人がいない。

山を守る為、木を間引いて薪にして地域のエネルギーにする事業。薪割り誰がするねん。

町の高齢者を対象にしたアンケート。こんなたくさんの封筒入れどうする・・・。

そんな『困りごと』を働きたい人たちの、人生の経験や自信になる『仕事』にしてしまう。

地域の中で、地域が回る仕事の中に居る仕組み。そんなステージに立つ彼らは働くことはかっこいいと生きる力を学び、そして男前になって地域に飛び出す。

働きもんが自分を見つける、困りごとの解決におまけが付く、地域が明日もある。三方よし。

『そして、10年・・・』



中途半端な輝ける場所 ～ 地域の中にあるステージ ～

地域を救う担い手はここに居る。

田舎という場所で、良くも悪くも世間で一番強いもんは、『ウワサ』。

地域の小さな「どうするねん」に、人も困りごととも仕事も集まるウワサを流し続けた。

そして、いつも丁寧な解決をしていく働きもん達の姿勢がまた色んなコトを集める。

地域のあちこちの、困っている場所に働きもんの働く姿がある町になりつつある。まだ途中・・・

そして、地元の企業は、そんな男前を受け入れる門を開いて待っている。

生きづらい人が『住める町』ではなく『住む町』・・・どんな人生のものがたりもミスはない。

凸凹が当たり前の地域へ

「明日も気張ろっ」

